



ただ信心を 要とするべし

宗教（仏教）と聞くと、一昔前なら「信心」「信仰」が連想されたのではないのでしょうか。それが今日では「葬式」「墓参り」など形ばかりになってしまっているのは、伝え教える人、聴き教えられ人がいなくなったという「末法」の世に私たちがいるということの現れです。

* * *

今インターネット販売の「商品」に「お坊さん宅配便」が出ています。仏教僧侶として賛同できるものではありませんが、一方的に批判する気持ちは今はありません。ユーザーが求めている「商品」が、「時間通りに所定の場所に来て、規定の料金で、お経を読んでもくれるお坊さんの姿をした人」というニーズから生まれた「商品」であるということは、いつか、偽ブランドのバッグを買ってしまったのと同じかもしれない、自分の望んでいる「いいもの」ではないと、まがいなりにも仏教を求めるユーザーなら気づいてくれるという希望を持っているのです。そのためには本物、いいものを作り続けなければなりません。

日常生活の中で仏法の気づきのご縁となるのが仏縁であり、そのお手伝い（お手次）をさせていただくのが僧侶です。私たち僧侶は

困難な時代の流れにあっても、み教えを曲げず、辛抱強く正しく伝えていくことを心していません。かつての日本がそうであり、イスラムやオウムなど、宗教は曲解され利用される危険性を持ったものだからです。

現実には僧侶やお寺が足りないわけではありません。コンビニより多いというお寺ですが、それは本来、信仰の場を持ちたいと願って建立されてきたため、今その多くのお寺が過疎化や核家族化の波にのまれ、ご門徒（檀家）が減っていく中で、限られたご懇志と檀信徒のご奉仕によって懸命に護持されています。批判されているようなお寺は全体から見ればほんの一握りであることは知っていただきたいと思います。

* * *

…弥陀の本願には、老少、 善悪のひとをえらばれず ただ信心を 要とするべしと…

「歎異抄」の第1条は、このことばで始まっています。

ご法事やお墓参りで仏さまに向かうときの「頭を下げる」という行為は、よほど抵抗する心がない限り誰にもできるでしょう。しかし、自然に「頭が下がる」ことは容易ではありません。そこに「気づき」がなければ下がらないものです。その気づきこそが信心です。この私には

「頭が下がる」ことが難しいことを気づかせるのです。「その気づきこそが弥陀の本願に逢うことができているということなのだよ」と親鸞聖人は述べておられたと、み教えが勝手に解釈されてくるのを嘆いて書かれた「歎異抄」は始まっています。

仏事は、気づいていなかった自分に気づかされる尊い仏縁です。お経は呪文ではなく教えが丁寧に説かれたもので、浄土真宗では、僧侶だけがお経を称えるのではなく参拝者共々に読ませてもらいます。それは、仏となられた故人からの「必ず仏にさせていただく世界があるよ。世の迷信や誘いに迷わず安心して生き抜いておくれ」とのおはたらきに対し、「わかりました。ありがとうございます」との私たちの応えの実践なのです。

親鸞聖人が生きられたのも末法の世でした。その生涯は最期まで、罪、救い、煩惱との緊張感と、しかも揺るぎない「安心」の中に、真摯な念仏者の生き方を貫き、煩惱に苦悩する自らを隠そうとせず、一度も「悟った」と言われなかった方です。書き残された数多くの著書をお味わいすると、私たちと苦悩を共にして下さった人間のもつ息づかいが聞こえ、後の思想や哲学にも大きな影響を与えた思想家でもありました。よくよくお味わい下さい。 合掌

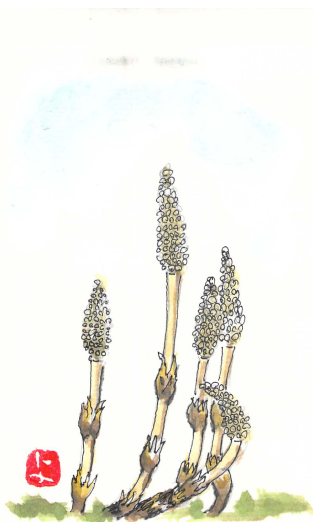
奏庵法座
彼岸会

日時
3月26日(土)
午前11時～

「み仏に抱かれて」
阿弥陀経
住職法話
ご文章拝読
「恩徳讃」
～*～
おとき

気候はまさに三寒四温そのもの。不安定な時代に比例してか、加齢のせい、年々その温度差を厳しく感じます。インフルエンザの心配が去ったと思えば花粉症…、その都度自然に対応し、私たちは結構たくましく生きています。

そんな姿を「それでいい」と励まして下さるのがさまです。どうぞお参り下さい。



龍溪寺の永代経

去る十八日、春の永代経法要を厳修いたしました。

永代経とは、永代経というお経があるのではなく、永代にお経が続き、そのお経に説かれたみ教えを聞く場が失われないように願って勤められるものです。お寺は、永代経のご懇念にこたえて、必要な仏具や法衣を整えたり、護持の基金にさせていただき、永代経法要としてお勤めします。

龍溪寺では、春秋のお彼岸に合わせて年二回、ご懇念をいただいた方に案内を差し上げ、永代経懇志のお扱いとして、その仏縁を結んで下さった方々の法名を記した法名軸をご尊前にお掛けし顕彰しています。

他家に嫁いだ娘さんたちが、今はこの仏様の前が実家だと子供や孫とお参りされる姿はその場を和やかにし、他の参拝者の心も温かくしてくれ、そんなお一人お一人がお互いを念仏者に育むはたらきをしていることがお味わいできる法要です。

永代経へのご質問がありましたら、いつでも遠慮なくお尋ね下さい。

私に
ご縁が
あると
思っていたが
あらゆる
ご縁が
私を
ここまで

(京都仏光寺八行標語より)

ニュースで新しく音楽の教科書に選曲された歌を聞いて憤慨し、数学者で「国家の品格」などの著書で知られた藤原正彦氏が数年前のコラムに【文語を知る幸せ】と文部省唱歌「ふるさと」を語られていたのを思い出す。■50歳を過ぎる頃から涙ぐんでしまうようになったと書いている。

♪如何にいます父母～、恙なしや友がき～♪あたりから目頭が熱くなり、♪志を果たして～いつの日にか帰らん～♪で完全にいけなくなるというのである。我々もカナダにいた頃、何かの折には数少ない日本人が集まり、工夫して作った日本食を囲み、「ふるさと」を歌うことがあった。

「志を果たす」というような崇高な目標があったわけでもなく、帰ると思えばいつでも帰れる時代だったが、必ず胸が詰まって歌えなくなったものだ。■「うさぎが美味しい」と間違えるから、歌として古臭く退屈だからという、わかったような小賢しさで、これからの世代に触れさせなかったら、日本人から文語という素晴らしい文化遺産を取り上げることになる。文語は宝だ。口語に比べ格段に簡潔で格調高く、詩や歌に適していて暗唱しやすく、少々難しくても頭の中に残っていれば、いつかそういう場面に遭遇したとき思わず口をついて出、感動を生む。それに比べ今の歌はくどくどと感動(?)を押し付け、そこに文語の持つ余韻も奥ゆかしさもない。いくら耳障りの良いセリフを並べても美しくはないのだ。

■法要の際僧侶が読み上げる「表白」にも口語体ができて久しいが、私は絶対文語体だ。文語の響きが、坊主として死ぬまで至らぬだろう恥ずかしさを補ってくれる気がするからだ。

■人は感動した時、生きててよかったと思えるものだが、その感動を特別なものに求めていないだろうか。日々同じ景色に生き、同じ恵まれた自然に生かされながら感じるもの。文語の響きには、日々の何気ない喜び悲しみをより美しく謙虚に感動させてくれる力がある。 Norimaru